

刀剣の国際比較研究

可能性と限界

(シュテファン・メーダー)

新たな問題設定は、一連のテーマのこれまでなおざりにされてきた側面に対する視線を鋭くさせるという意味で、研究に大いなる貢献を果たしている。東アジアとヨーロッパのように、地理的にかくも遠くへだたった世界の 2 地域の文化史に関する具体的な比較研究は、つい先ごろまで、それぞれの文化圏の歴史に与える影響という面からは、ほとんど顧みられなかったか、あるいは偏見が全くないとは言えない懐疑的な目で見られていた。これまでは、双方の慣習が、東西間の精神史上の性質及び実体的な性質の偶然であるとして片付けられることの多い分析の客観的審査につながることはまずなかった。十分過ぎるその理由の筆頭は、依然として、先入観や否定できない言葉の壁である。ここでは、定評ある専門家が自らの専門分野について述べた名言 2 例を引用してみたい。以下に挙げたこれらの名言は、今もなお、アジアとヨーロッパの文化史及び技術史の比較に対する広く普及した見解の代表格となっている¹。

- ドイツ人の見地：「一体我々が何を日本人から学ぶべきだというのだ？この 150 年間というもの、彼らは何もかも我々から見覚えていったじゃないか。」
- 日本人の見地：「ヨーロッパや中国や韓国の素材は国産のものとは非常に異なっているので、日本のものと比較することは全くできない。」

双方の科学者が、これらの見解を述べた時点ではそれぞれ全く比較できない文化圏からの原資料とまだ接触していなかったという事情は、客観的な国際協力に対するこの見解の意義がどの程度のものかを如実に示している。今後は、西側諸国に対する中国のゆっくりとした門戸開放によって、古い中国文化や中国の技術上・精神史上の偉業の計り知れない影響が、これまで伝えられてきたような我々の歴史観を豊かにしてくれるであろう。

「今や良く知られているように、中国はとつくの昔に万物を発見している」²という軽妙な

¹ この 2 つの名言は、アジアとヨーロッパの鍛造技術及び表面技術に関する筆者の比較論文について言及したものである。どちらの同輩も、既に本研究の結果を熟知しており、自分達の最初の評価を修正した。

² Tredwell, W.R. : Chinese Art Motives Interpreted (London 1915), p.5.

コメントを残した W.R. TREDWELL は、中国における最近の考古学的知識という観点から見れば、彼が 100 年近く前に夢想できたと思われる以上に正しかった。ヨーロッパにおいて先史時代・原史研究の画期的な知識が得られたのはこの数十年ほどの間であるにもかかわらず、今日に至るまで、メソポタミア、エジプト及びペルシャの文化のヨーロッパ古代史に対する寄与は、詳細かつ正当に評価されている。だがそれに対し、新石器時代から青銅器時代までの間に東アジアから受けたと考えられる影響は、中国に関する古代ローマの記録の中で認識されているその重要性に比べれば、考古学分野の広範なグループから、わずかな意義しか認められていない。2、30 年ほど前からは、東洋と西洋を結ぶ様々ないわゆるシルクロードに対する調査によって、また最近では東アジアと西洋との間の住民の暮らしぶりに対する調査によって、実体的な文化や文化史、宗教史に関する新しい知識もたらされるようになってきている³。

地域によって開始時期の異なる鉄器時代の初めから 19 世紀まで、鉄製品及び鋼鉄製品の最高水準を具現化したのは徹甲剣であった。その中でも「両刃の短刀から発達した」剣は、ヨーロッパから東アジアまでの大半の文化において、早くも青銅器時代から、冶金学上の観点のみにとどまらない特別な役割を有していた。専門知識を持つ聴衆の前では何度も繰り返す必要のないことであるが、日本の長刀の刃のみならずヨーロッパの長剣の刃も、矛盾した機械的要求を課されることを余儀なくされてきた。文化史にとってこれらの刃の重要性は、常に単なる殺傷道具の重要性の域をはるかに超えたものであった。とはいえ、刀剣の刃の包括的な国際研究にとって重要な学術分野をとりあえず簡略にアルファベット順に列記することは適切であるように思われる。

人類学：

出土遺物の骨における徹甲剣のメカニズムに関する調査。刀剣類を常時取り扱っていたことが推測できる骨格の変化に関する調査

考古学：

日本の鑑定制度を取り入れた、刀剣学に関連する発見物の発掘、記録、分析評価及び類型分類

天文学史：

時代の枠を超えて (少なくともヨーロッパ及びアジアの青銅器時代以降)

³ 特に次の文献を参照：A./Lind, Chr. (発行) シルクロードの原点 - マンハイム、ライス・エンゲルホルン博物館 - 中国・新疆からの驚くべき新発見。カタログ (ベルリン / マンハイム 2007/08)。

証明可能な徹甲剣と（刃、飾り金具及び付属品上の）星形図案との関連性

剣術：

使用のための実際的な再現は、純然たる形式上かつ技術上の知識を超えた理解に対する要求を含む、徹甲剣に関するすべての研究に対する要件である。

歴史学：

各々の文化及び時代における刀剣の性質及び用途のほか、意義及び外見に関する史料の分析評価

日本の刀剣学：

鑑定制度の応用及び様々な時代のヨーロッパの刀剣の描写との関連における実情に合わせたその調整

美術史：

飾り金具及び剣帯は、「流行」の影響を、刃よりも明らかに強く受けている。美術史の方法論は、鞘及び剣帯のほか、様々な刀剣類型の存続期間の調査にも有益な形で適用される。

文芸学：

中世の武装に関する文献学的調査はかなり多数存在しており、例えば中世スカンジナビアにおける刃の外見の明確なイメージを与えてくれる。

材料学：

元素分析は、特定の刀鋼の出所としての鉱床を特定するのに役立つ。それ以外の方法ではまず分析評価できない刀剣の金属組織学的分析により、熱処理及び構造設計に関する結果が得られる。

哲学：

様々な文化における武器の使用の根拠となる観念論的体系の調査。中国、日本、インド及びペルシャの戦争倫理学並びにヨーロッパの「キリスト教的な」騎士道の中の相応の文化的現象はその例である。

実用的な鍛造技術及び表面技術：

実用的な再現の試みは、昔の鉱山労働者及び精錬工、鍛冶師、研ぎ師及び研磨師の多種多様な能力を整理するための一助となる。

心理学から神経心理学まで：

精神レベルでの効果が生じるように刀剣を扱うための基本原則の解明。フエッシングに際して常に具体的な影響を及ぼす直感的知覚の潜在力の調査。

宗教学：

哲学と密接な関係にある。とはいえ刀剣の役割の研究は、キリスト教との関係だけでも、既に包括的な研究論文のための十分な材料を提供する。

言語学：

徹甲剣の国際用語、その語源、分布拡大などに関する比較研究

比較神話研究：

広義の宗教学。様々な文化の神話に登場する刀剣の意味の調査

もちろん、国際刀剣学の基盤としてその概略を上述した学術分野は、一体となって相互に入り交じっているため、これらを歴史的兵器学の部分領域として包括することは可能であろう。ただしその場合、「武器」という概念は言わずもがな、「兵器学」という概念を挙げたとしても、ドイツ語圏の学術分野では何も得られないという点で問題が生じる。著名な軍事史研究家（これは「軍国主義者」とは必ずしも同等視できない）の見解によれば、現在行われているような、「去る者は日々に疎し」ということわざに基づく主要な研究分野の除外は、意識的な歴史のねつ造にほぼ等しい。

人類の黎明期以来、兵器技術は、人類の文化の構成要素となってきたが、大半の場合、より致命的でない利器よりも迅速かつ広範に広まった。兵器技術の歴史及びこの悪循環の存続に対する徹底的な調査によって、いつの日かその悪循環を一度断ち切ることができるという希望がいまだに存在し続けなければならない状況は、今日までほとんど変わっていない。さほど遠くない昔と現在との間の根本的な相違は、この兵器技術の解釈及び取扱いにある。倫理的で平和主義的、特にキリスト教的な要求を持つ近代社会における経済的要素としての国際武器取引に高い位置価値が与えられていることは、その意味で明白である。兵器技術に対する社会的受容性が現在いかに低下しているかは、あらゆる歴史研

究が、今の時代との具体的な関連を持たずに、自らの孤立に、ひいては「食傷気味の平均的な大多数の人々からはアカデミックな象牙の塔とみなされている」「専門機関の閉鎖にひたすら寄与していることを示している。ここでは、象徴的意義が大きかった過去のハイテク製品に対する比較研究の根拠について詳述してみよう。